

# サッカー・ディベートの実践による考察

プロジェクト構成員  
平水利憲, 田中 健, 古川 薫

指導教員  
齊藤久美子 (経済学部)

## 【演習の背景・目的】

サッカー・ディベートは、国際ディベート学会会長 松本道弘 氏が考案されたディベート形式で、人間の論理を知的な面（石と風）と情的な面（火と水）に分け、その4つ及びその交差する点（空）の5つの役割を各人が担い、ディベートを行うというものです。尚、通常はバイリンガル・ルールを用いています。つたない英語を駆使して、サッカー・ディベートに挑み、論理的思考を養うためにこの自主演習を行いました。

## 【演習の実施方法】

2004.10. 8

- ・今後の方向性や自主演習全体の流れを確認した。次回の学外演習の論題『皇室は一般社会に開かれるべきである』について各人で調べる期間とした。

2004.10.22

- ・次回の学外演習の論題について模擬ディベートを行った。

2004.10.23~24

- ・立命館大学で行われた、学外演習に参加した。

2004.11. 5

- ・学外合同演習の議事録を作成した。次回の学外演習の論題『日本は政治的・経済的に脱米入亜すべきである』について調べる期間とした。

2004.11.20~21

- ・天理大学で行われた、学外合同演習に参加した。サッカー・ディベートの録音結果を基に議事録を作成。加えて、各人が論題についての考察と、サッカー・ディベート自体についての考察を行う期間とした。

2004.12.17

- ・今年一年の活動を振り返り、来年の活動について話し合った。今までの活動記録を基に、各人で総括を作成する期間とした。

2005. 1.14

- ・各人の総括を基に、全体的な総括を行った。本報告書をまとめる期間とした。

2005. 1.17

- ・本報告書のまとめを全体で確認し、次期の活動についての方針を決定した。

## 【演習の成果】

ここでは、2004年11月20日に天理大学で行った『日本は政治的・経済的に脱米入亜すべきである』の考察を載せる。

### 《石の考察》

脱米入亜の定義が曖昧である。プランが明確でない。(肯定側)

東アジア共同体（略称：EAU）ができればいいのか？軍事面のウェイトが大きいのが、経済的側面から見た場合、例えばドル資産の保有量や貿易額の視点からの数字目標があると説得力が増す。

プランを意義付ける大義名分・哲学がない。（肯定側・否定側）

何のために EAU を成立させるのか？細かな理由でなく、国益や世界情勢等の対極的な視点が必要。

2つ目の立論、「イラク問題」において、日米関係との関連性が述べられていないため、問題点として認識できない。（肯定側）

日米安保の影響で自衛隊をイラクに派遣せざるを得なくなった、というような内容があれば脱米すべきだという立派な論拠になる。

プランの実効性が述べられていない。（肯定側）

3つの問題点を述べているが、それをEAUというプランが解決するかが述べられていない。

肯定側の論拠を否定していない。改革の必要性を否定しないまま現状のメリットだけを述べているため、具体性がない。（否定側）

肯定側の問題点を1つずつ否定する、もしくは肯定側のプランとは別の方法でその問題点を解決するという議論が必要である。

数字的データの出所や根拠に乏しく、三角のロジックとして成立していない。（肯定側・否定側）

立証責任を果たしていない。例えば、EUの市場が好調であることを主張するのであれば、具体的な数値を述べる必要がある。

「アメリカからの食料輸入が止まれば、日本人は餓死する」という、根拠のない滅茶苦茶な立論がまかり通っている。（否定側）

反対尋問に対して、的外れな回答をしている。（否定側）

#### 《風の考察》

相手が答えられない、的外れな答えを言うということは、それだけ相手の弱みをついていたと考える（肯定側）

質問が簡潔でなく、筋の通っていない質問があった。（肯定側）

全体の流れを考えて質問しないといけない。

後のサッカー・ディベートにつながっていない。（肯定側・否定側）

良い質問をしても、肝心なところで次の質問に移ってしまっている。（否定側）

#### 《火の考察》

非常に情熱的な話し方で、聴衆にうったえかけるものがあった。（肯定側）

自身の体験から主張に移る部分で、話が飛躍しすぎるため、論理的でない。（肯定側）

体験と主張の刷り合わせが必要。

体験と言える部分が少ない。（否定側）

タイム・オーバーは大きな減点要素である。（肯定側・否定側）

#### 《水の考察》

立論の繰り返しになっている。（肯定側）

これまでの議論を受けて自身の主張の正当性を言う、という部分が論理的でない。なぜ自分たちの主張が正しいのかが述べられていない。（肯定側）

あらかじめ用意されたスピーチではなく、それまでの議論を受けて反駁を行うことが重要。

適切に相手の議論を認め、その上で自身の正当性を言っていた。（否定側）

#### 《空の考察》

空が発言しすぎて、他のディベーターの意思と異なる発言をしてしまう場面があった。（否定側）

適切な場面で他のディベーターのフォローをしていた。（肯定側）

サッカー・ディベートの際に中心になっているのは良かったが、1人で暴走している感が強い。（肯定側・否定側）

## 《サッカー・ディベートの考察》

軍事面での論議をするのはいいのだが、出口が見えない。議論の目標となる所が見えないため、話がどんどん脱線している。

1つの話題が決着ついてから次の話題に移るようにすべき。

風の質問を活かせていない。

肯定側からのサッカー・ディベートがそれまでのサッカー・ディベートを引きずってしまっているのが、効果的でない。

## 【今後の検討課題】

今回の後期自主演習は10月の立命館大学でのサッカー・ディベートと11月の天理大学でのサッカー・ディベートを実際に行い、その中の反省点からサッカー・ディベートを学んでいった。

前期自主演習では、三人でサッカー・ディベートを基礎から勉強し、サッカー・ディベートを実際に行ったので、後期は論題実践を考慮した勉強から始めていった。

まず10月の初めには立命館大学で行われる「皇室はもっと一般社会にひらかれるべき。」という論題から立論等を立て勉強していった。立命館大学でのサッカー・ディベートは、全て日本語でのサッカー・ディベートとバイリンガルでのサッカー・ディベート、両方で行われた。バイリンガルとなると英語が入ってくるので、立論やサッカー・ディベートで聞き取れない部分があり、前期からの課題である英語の部分を改善していかなければ、他大学とのディベートにはついていくことはできないと感じた。

11月は「日本は政治・経済的に脱米入亜すべきである」という論題の勉強に移った。田中、古川が参加したが、英語の部分は改善できていなかった。また、後日の反省で、立論や反対尋問等の内容、表現の仕方等に課題を見つけた。これは講評の部分で詳しく述べたが、このことに関しては自主演習だけではなく、他大学の人達と相談していくことが重要であると感じた。

このように二回の他大学とのサッカー・ディベートに参加したが、反省点としては英語の勉強を進める。最低リスニングができるようになればサッカー・ディベートの内容を把握できるので今後のために頑張っていきたい。今回の自主演習では、前期に行った模擬ディベートができておらず、また、与えられた論題を受身的にやっていくことしかできていなかった。だが、実際のサッカー・ディベートを録音し、文章にして打ち出すことで自分たちの発言を客観的に評価できたことは非常に今後の参考になると考えられる。

今後は模擬ディベートを行い、他大学の人達との交流の中で自らのディベート力をさらに磨いていきたいと考える。